

## 蘭学の泉はここに

1754（宝暦4）年に日本最初の解剖（観臓）をした山脇東洋（1705～1762年）を本誌2009年1月号の本欄で紹介した。それから17年後の1771（明和8）年に、杉田玄白（1733～1817年）らが小塚原刑場で刑死体の解剖を見学し、「解体新書」を翻訳出版したのは1774（安永3）年のことである。

玄白らが翻訳したのはドイツの解剖学者クルムス（Johann Adam Kulmus, 1689～1745年）の「解剖図」で、1734年刊行のオランダ語版であった。表題は「解剖図～人体とその各部の構造と役割を簡明に解説。明解さのために企画し注釈した銅版」であり、玄白らの「ターヘル・アナトミア」は *tabulae anatomicae*（解剖図）に由来している。

JR常磐線南千住駅前の回向院の境内に立派な観臓記念碑（写真1）がある。

東洋がまとめた日本で最初の解剖書である「臓志」（1759年）ではなく、なぜ、玄白らの「解体新書」が近世日本医学史に特筆されるのか。玄白が晩年に著した「蘭学事始」（1815年）には、翻訳作業の苦労話や蘭学が隆盛に至るまでの軌跡などが記されている。“誠に艱<sup>ろ</sup>難<sup>か</sup>なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれて居たるまでなり”と玄白が記したように、1冊の辞書もなしに「ターヘル・アナトミア」を翻訳出版したことである。

東京都中央区明石町にある聖路加国際病院の西南に「解体新書」の絵を刻んだ碑がある（写真2）。それはこの辺りが、中津藩主奥平公の中屋敷があったところで、「解体新書」の翻訳作業が行われた中津藩医前野良沢（1723～1803年）の家宅があったことによる。

この記念碑は、ちょうど本を左右に開いて立てた形で、右側の面には「解体新書」の序図の巻に掲げられている最初の解剖図にある男子の背面図が模刻され、左側の面にはこの碑を建てた由来が“蘭学の



写真1 観臓記念碑

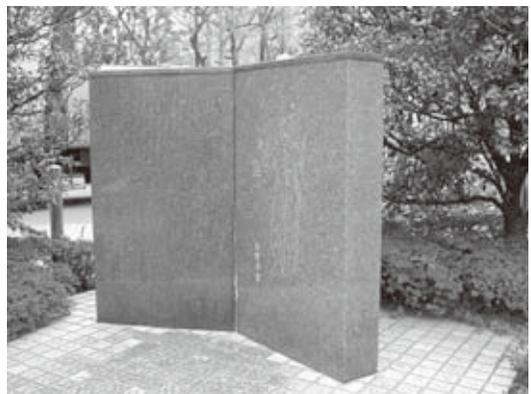


写真2 解体新書の碑

泉はここに”と題して刻まれている。

撰文は東京大学教授（当時）の緒方富雄（1901～1989年）であるが、「…1774年安永3年8月に「解体新書」5巻をつくりあげた。これが西洋学術書の本格的な翻訳のはじめで、これから蘭学がさかんになった。このようにここに蘭学の泉はわき出て、日本の文化の流れにかぎらない生気をそそぎつづけた。」とある。

ここで興った蘭学は玄白の言葉を借りれば、一滴の油を広い池の中に落とせば散って池全体に及ぶことがあるように、西洋医学の本格的研究の端緒になったものとして「解体新書」が持つ意義は大きい。

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕